

## スタートアップによる医療用AIの新たな活用

### ◆AI活用で、臨床に多忙な医師をサポート

医師の長時間労働が問題になっている医療現場で、臨床に多忙な医師をAI活用によってサポートする取り組みが始まっている。医療×人工知能（AI）の研究開発に注力するスタートアップ、エクスメディオ（高知市）は、2017年12月から、同社が提供する臨床支援サービス「ヒポクラ」に新たな機能「Bibgragh」を追加した。これは、医療文献の日本語検索サポート・サービスで、スマホやタブレットからも利用可能、AIが関連する論文を推測、提案することで、論文検索を効率化できる。利用者はすでに5万人を超えているという。

また同社は、18年春には高知県梶原町で、遠隔医療と医療用AIの実証研究プロジェクトを開始する。梶原町立国民健康保険梶原病院を舞台に、「ヒポクラ」を用いて、同病院の医師が専門外の患者を診察する際に患部画像や問診情報を都市部などの専門医に送って助言を受ける。みずほ銀行が資金面を支援し、最終的には過疎・高齢化が進む地域での遠隔医療モデルをつくり、全国展開を目指す。さらに実証研究で蓄積したデータは、医療用AI開発につなげていく計画だ。

### ◆AI活用の問診システムで、診察前に病気を推察

医師とエンジニアで起業したUbie（ユビー、東京・品川）は、18年1月末から、病院向けに、AIを活用した問診システム「AI問診Ubie」の提供を始める。通常、患者が紙に書く問診票をタブレット端末に置き換え、症状や痛み、年齢、性別、病歴などを入力してもらう。問診の結果、症状と病気の関係を学習しているAIの解析によって、疑われる病名が表示されるので、医師は患者の診察前に病気のある程度推察することができる。さらに、問診内容は医療用語に自動変換され、電子カルテに複写しやすくする。医師は電子カルテに一から入力する手間が省けるので、より患者に集中して診察や検査に注力できるという。現在、12ヵ所のクリニックで試験導入しているが、医師側の反応はよいという。

医療用AIは主に画像診断に使われてきたが、スタートアップによって範囲が拡大し、今後は医療現場のさまざまな場面での活用が期待される。【秋元真理子】